

肺結核ノ一般療法 (宿題報告) (承前)

醫學博士 田澤 鏡 一一

一年各月ノ氣象ト肺結核症候トノ關係

由來肺結核ノ療養ニハ寒冷ノ季節ヲ恐レルコトガ一般デアリマシテ、夏ハ消化器病、冬ハ呼吸器病ヲ警戒スベシト概言サレル中ニ含メラレテ居ルヤウニ見エマスガ、冬季ノ大氣療法ニ於テ良好ノ成績ノ得ラレマスコトガ確實デアルトスルト寒氣ト肺結核症候トノ關係ガ一ツノ問題トナツテ來マス。

東京市療養所ニ於ケル患者數ト死亡者數トノ比率ヲ月別ニシテ表示シマスト、第三十九表ノ如クニナリマス。年ニ依リテ多少ノ相違ハアリマスガ、何レニシテモ一月、二月ノ頃ガ死亡率ガ高イトハ決シテ申サレナク、却テ冬季ハ死亡率ガ明ニ低クアリマス。又日本全國ノ統計デハ患者數ト死亡者數トノ比率ハ分テ居マセンガ、全結核死亡數及肺結核死亡數ハ第四十表及第四十一表ノ通りデ、之モ同ジク一月、二月ハ毎年低クアリマス。故ニ此ノ二成績ハ何レモ冬季ガ安全デ、夏季ガ危険ナ時期ダト云フコトヲ示シテ居リマス。之レハ一面カラ見レバ我療養所ニ於ケル寒冷季節ノ開放療法ガ有害ナ方法トハ見ラレナイト云フ一ツノ證據ニモナルト考ヘマス。

第三十九表 東京市療養所年別及月別死亡率(百分率ハ在所患者數ニ對スルモノ)

年別	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	其年ヲ通シテノ死亡率
大正九年						八・〇	一三・六	九・四	一四・二	一四・七	一二・八	一三・八	三六・六
大正十年	一一・五	一〇・三	一一・二	一一・一	一二・八	一一・〇	一三・八	一三・六	一一・五	一五・七	九・二	一〇・六	五〇・一
大正十一年	一〇・五	八・八	一〇・七	一〇・三	一三・一	一〇・九	一二・九	一二・四	一一・八	九・九	七・一	九・三	四七・一

大正十二年	九・〇	八・六	八・〇	七・六	一〇・三	九・一	一一・〇	八・五	九・二	一四・九	一三・六	一一・八	四二・八
大正十三年	九・一	八・三	七・八	八・八	九・三	九・五	一一・六	一〇・一	九・六	九・三	九・三	九・〇	四三・四
大正十四年	一〇・〇	七・四	八・四	八・四	八・九	九・〇	九・七	一〇・九	九・四	一一・五	九・一	一一・四	四三・九

第四十表 日本全國ニ於ケル月別肺結核死亡數

年別	月別	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
自明治三十九年	五ヶ年平均	五・九八二	五・八五九	六・八四八	六・九九九	七・三四八	六・七八一	六・九五六	六・九五六	六・七三七	六・四〇七	五・八四六	五・八五七
至同四十三年	五ヶ年平均	六・七七八	六・〇九五	七・〇四六	七・〇五五	七・三八六	七・〇四三	七・二四八	七・二六一	六・九〇九	六・八六三	六・一九七	六・六二
自明治四十四年	五ヶ年平均	七・〇七五	六・八三二	七・八六六	七・六五四	七・九三二	七・四五二	七・八〇二	七・七〇七	七・四二五	七・七九〇	九・三七六	七・三九一
至同四十七年	三ヶ年平均	七・〇七五	六・八三二	七・八六六	七・六五四	七・九三二	七・四五二	七・八〇二	七・七〇七	七・四二五	七・七九〇	九・三七六	七・三九一

第四十一表 日本全國ニ於ケル月別全結核性疾患死亡數

月別	年別	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
自明治三十九年	五ヶ年平均	七・六三八	七・四五三	八・六八四	八・八六一	九・四四四	八・八九二	九・三四四	九・七三五	九・四二八	八・七二二	七・八〇〇	七・六八五
至同四十三年	五ヶ年平均	八・五三二	八・二五三	九・四五〇	九・三九八	一〇・〇一四	九・七二九	一〇・二八九	一〇・五二〇	一〇・〇四三	九・六九八	八・五九二	八・五六六
自明治四十四年	五ヶ年平均	九・七五四	九・三三六	一〇・七五五	一〇・五五四	一一・一〇六	一〇・六五七	一一・三〇二	一一・六四五	一一・二一〇	一一・二八五	一一・四一〇	一〇・二二八
至同四十七年	三ヶ年平均	九・七五四	九・三三六	一〇・七五五	一〇・五五四	一一・一〇六	一〇・六五七	一一・三〇二	一一・六四五	一一・二一〇	一一・二八五	一一・四一〇	一〇・二二八

寒冷季ニハ死亡率低ク、夏季ニハ死亡率が高イトイフ事實ニ基イテ果シテ寒季ハ心配ガ無ク、夏季ハ危険ダトイフ結論ヲ下シ得ルカ否カノ問題ニ就テハ先以テ種々他ノ考察モ巡ラシテ見テバナラナイ。其ノ一ツノ考方トシテ凡テ寒氣ノ調節ハ容易デアルガ暑氣ノ調節ハ困難ナモノデアアルカラ、タトヒ寒暑共ニ好ク調節シテ中等度ノ室温ニシタガ最良デアルト假定シテモ如上ノ成績ガ起リ得ル筈デハナイカトイフコトモ考ヘテバナリマセン。尙一ツ問題トナルハ夏季ニ於イテ重症ノ、衰弱シタ患者ガ暑氣ニ堪ヘナイデ多ク死亡スルト云フコトハ事實トシテモ、此事實カラシテ、中等症若クハ輕

症デ暑氣ニモ堪ヘ得ル力ノアル患者ガ、冬季ヨリ夏季ニ多ク病狀ノ惡化ヲ來ストカ、又ハ冬季ノ方ガ治療サセル率ガ多
イトカ云フ推論ヲ下シ得ルヤ否ヤハ別ノ問題デアルト思ハレマス。

上記ノ第一ノ論點ニ就テハ東京市療養所デハ開放療法ヲ勵行シマスルノト、從來暖房設備ガ不完全デアツテ大キナ病舎
ノ中ニ「ストープ」ガ三四個入レテアルニ過ギズ、ソレモ一日中朝夕二回シカ焚カナイノデアリマスカラ到底溫度ノ調節
ガ適當ニサレルトハイハレナク事實上病室内ノ溫度モ第四十八表ニ掲ゲタ通り低クアリマス、夏季ハ無論炎暑ガ甚シク
アリマスガ、コノ時ニハ窓ノ開放ハ風通ヲ好クシ涼氣ヲ齎スモノデアリマスカラ、他ノ一般病院又ハ家庭ノ病室ニ於テ
モ自然行ハレマス故、我ガ療養所ニ於イテモ是レト大差ハアリマセン。故ニ東京市療養所ノ患者デハ、死亡率ノ夏季ニ
比シ、冬季ニ少イノハ夏季ニ於ケル溫度調節ノ爲メデハナク、事實寒氣ノ方ガ暑氣ヨリ安全トイフコトヲ示スモノデアリ
マス。然ラバ寒氣ノ調節ヲ完全ニスレバ一層ニ死亡率ガ減ズルカトイフニ、ソレハマダ分リマセンガ、兎ニ角肺結核治
療上ノ問題トシテハ全ク無刺戟ノ中等度ノ室温ノミニ患者ヲ置クトイフコトハ不利ナル舊式ナ方法トセラレテ居リマ
ス。即チ餘リ完全ナ寒氣ノ調節ハ却テ完全ナ治療ヲ意味スルモノトハサレテ居マセン、之ハ上記第二ノ問題ニ關スル
件デアリマスガ、私モ上記第二ノ問題ニ關シテ何トカ調査シヤウトシテ、寺尾殿治君ト共ニ氣象ト肺結核症狀トヲ一年
三百六十五日ヲ通ジ毎日對比シマシテ、其ノ結果左ノ如キ成績ニ至リマシタ。即チ

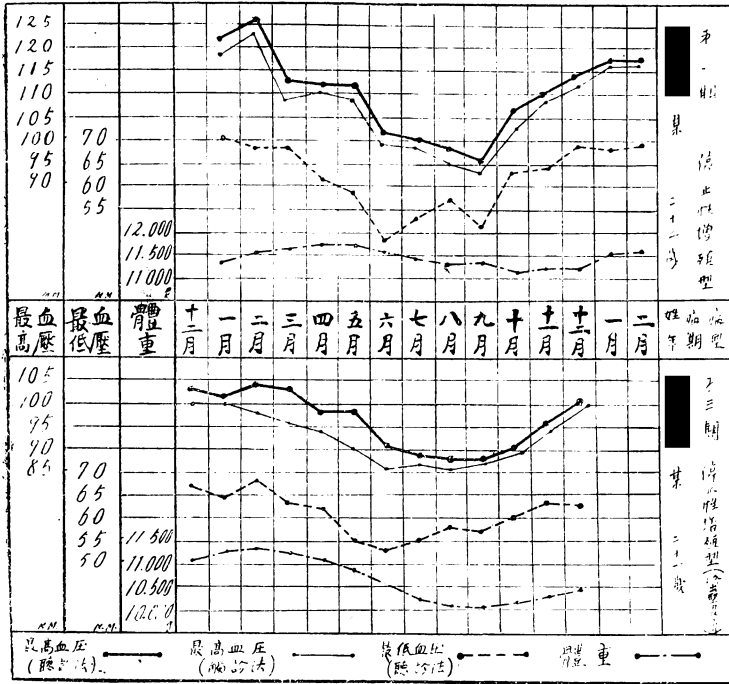
一ケ年間ノ毎日ノ氣溫、濕度、氣壓、天候、風速等ヲ測リテ、れ號病舎ノ在所患者二十八名(中途ヨリ若干名退所)ノ日
日ノ症狀ト對比シタノデアリマスガ、未ダ一年半程ノ觀察ニ過ギマセンカラ、詳細ナコトハ後ノ機會ニ讓ルコトニシテ
最モ明ニ出タ成績丈ケヲ申上ゲマス、體溫ガ上昇又ハ下降ヲ示シ、ソノ變化ガ溫度表ノ上デ顯著デアツタ場合ニ、其
ノ都度是レヲ一回トシ、各月ニ其ノ回数ヲ合計シテ比較シマシタ處別表ノ如ク其ノ回数ハ夏季ノ六七八三ヶ月ガ殊ニ
多クアリマシタ。而シテ此ノ三ヶ月ノ氣象ニ於テ目立ツモノハ氣溫高クシテ、而カモ比較濕度ノ平均ガ著シク高イト
云フコトデアリマス。氣溫ガ高クシテ而カモ比較濕度ガ高イノデアリマスカラ、其時ノ水蒸氣ノ量ハ非常ナモノデア
ツタ譯デアリマス。即チ甚シク蒸シ暑イ時季デアリマス。比較濕度ノ平均ガ高イコト故、濕氣ノ多イ時間ガ比較的長

ク續イタモノト見ラレマス。是ニ比スルト寒冷季殊ニ一月、二月ノ頃ハ決シテ比較湿度ノ平均が高い方トハイハレマセ
ン。
循環系ノ状態ニ就テハ急ニ脈搏數ノ増加又ハ減少シタ時ソレヲ一回ノ増又ハ減トシテ、各月ノ變動ノ頻度ヲ調べタノデ
アリマスガ、急ニ増加シタ回数ノ多イノハ三月デアツテ、次ハ四月、二月、一月等デアリマス。十月、十一月、八月、
九月等ハ少イ方デアリマス。急ニ減少シタ度數モ一月、四月が最高デ八月以降ハ十一月ノ外ハ凡テ零デアリマス。是ハ
多分季節ノ關係トハ別デ寧ロ一年間ノ療養ニ依テ心臟が強クナツテ脈搏數が安定トナツタトイフコトヲ示スモノデアリ
マセウ。

第四十三表 患者各月ノ體溫脈搏變動回数及室内氣象ノ摘要表(大正十四年)

調査事項 月	各延 月人 ノ員	體溫變化		脈搏變化		室内氣象							
		上 回数 對延人員ニ スル%	降 回数 對延人員ニ スル%	増 回数 對延人員ニ スル%	減 回数 對延人員ニ スル%	平均湿度	平均湿度 (氏攝)	平均室内 溫度 (氏攝)	平均室内 溫度 (氏攝)				
一 月	846	29	3.4	12	1.4	27	3.19	21	2.48	68.5	4.5	6.5	-0.4
二 月	756	20	2.7	5	0.7	30	3.97	9	1.19	69.3	3.5	6.4	-0.7
三 月	837	25	3.0	9	1.1	48	5.73	2	0.24	68.4	7.1	12.6	1.1
四 月	810	8	1.0	3	0.4	36	4.44	2	2.46	69.2	12.5	17.0	7.2
五 月	826	25	2.8	2	3.1	18	2.18	3	0.36	76.7	17.1	22.3	11.8
六 月	736	40	6.0	9	1.2	13	2.44	7	0.95	79.5	20.9	24.6	16.9
七 月	743	70	9.4	29	3.9	12	1.61	1	0.13	83.0	22.4	28.1	19.5
八 月	709	81	11.4	39	5.5	10	1.41	0	0	84.3	27.7	29.0	22.3
九 月	587	29	4.9	21	3.6	9	1.53	0	0	84.3	23.1	26.5	19.2

第四十三表
一年各月ノ患者血壓昇降表



月	最高血圧 (聴法)	最低血圧 (聴法)	體重
十一月	243	10	4.1
十二月	248	10	3
一月	253	10	1.2
二月	258	10	7
三月	263	10	2.88
四月	268	10	0
五月	273	10	0
六月	278	10	71.3
七月	283	10	7.1
八月	288	10	12.8
九月	293	10	1.0
十月	298	10	
十一月	303	10	
十二月	308	10	

氣象觀測午前六時、十時、午後三時、七時

原著 田澤 肺結核ノ一般療法

鈴木左内君ガ本療養所ノ患者ニ就テ一年十二ヶ月間ノ各月ノ循環系症狀ヲ調査シマシタ。其成績ハ固ヨリ各人一様トハ云ヘマセンガ、最大血壓及最小血壓共ニ十二月、一月等ノ寒季ニハ高ク、暑季殊ニ七月、八月頃ニハ低ク、次ノ寒冷季節ニ至テ復上昇シテ居ル。

トイフ例ガ多クアリマス。是ハ健康者ニ就テハ既ニ報告サレテ居ル成績デアリマスガ、結核患者ニ就テハマダ見當ラナイヤウデアリマス。而シテ私ハ此血壓昇降ニ依テ示サル、血管緊張度及心臟力ノ季節的高低ガ、肺結核ノ死亡率及症候ノ季節的消長ト相竝行スル點ニ大ナル興味ヲ感ズルモノデアリマス。上ニ鈴木君ノ例ノ一二ヲ紹介シテ置キマス。

體重減少モ夏季ニハ多クハ明ニ認メラレマスガ是レハ本療養所トシテハ食物建築物其他ノ不完全ナ

第四十四表 患者各月體重増減表

病期	第一期				第二期	第三期
	病勢	輕快	停止	増悪		
月別	總計	總計	總計	總計	總計	總計
十一月	12.080	11.910	12.460	12.150	12.160	12.690
十二月	12.290	12.200	12.860	12.450	12.240	12.950
一月	12.300	12.400	12.800	12.500	12.770	12.870
二月	12.750	12.470	12.700	12.630	13.000	13.020
三月	13.180	12.640	12.810	12.880	13.100	13.000
四月	13.340	12.770	12.850	12.980	12.890	12.930
五月	13.280	12.610	12.840	12.940	12.620	12.840
六月	13.140	12.610	12.600	12.780	12.480	12.810
七月	12.990	12.510	12.480	12.660	12.260	12.540
八月	12.760	12.210	12.180	12.380	12.220	12.320
九月	12.780	12.110	12.110	12.330	12.330	12.320
十月	13.080	12.270	12.210	12.530	12.400	12.030
測定人員	9	10	7	26	8	8

備考 病期分類ハ「ツルパン、ゲルハルト」ニ從フ

第四十五表 各月體重増減回數表
(開放療法條下れ號病舎調査)

事項	甲組九名		乙組四名		合計
	自一月末	至十一月末	自一月末	至十二月末	
月別	增加	減少	增加	減少	合計
一	一	一	一	一	一
二	一	一	一	一	一
三	一	一	一	一	一
四	一	一	一	一	一
五	一	一	一	一	一
六	一	一	一	一	一
七	一	一	一	一	一
八	一	一	一	一	一
九	一	一	一	一	一
十	一	一	一	一	一
十一	一	一	一	一	一
十二	一	一	一	一	一

體重ハ一週一回朝食前ニ測定シ増加、不變、減少ハ何レモ前週ノモノト比較シタルモノナリ。

表ハ體重ソノモノ、平均價ヲ見タノデスガ、今回復我々ハ體重増減ノ回數ヲ調査シマシタ。ソレハ徹底的ニ開放療法

ル條件ノ免レ得ザルモノアルガタメ一層顯著デアルカトモ思ハレマヌ。本所患者ノ各月ノ體重増減ノ割合ハ嘗テ鈴木左内君ガ取纏メマシタ。是ハ多數ノ患者ノ中カラ一年以上在所シタ者デ、病狀ノ安定ニナツテ居ルモノ四十二人ヲ選ミ、一ケ年間ノ毎週ノ體重測定成績ヨリ各月ノ平均價ヲ求メタルモノデアリマスガ、是ヲ熟覽スルト體重ノ最高ナルハ四月ニ多ク、或ハ又三月若クハ二月ニ最高ナルノモアリマス。要スルニ二、三、四、五月等ハ體重ガ高クアツテ、反對ニ八月、九月ハ低クアリマス。就中九月ニ低イノガ最も多クアリマス。十月ニ入ツテカラハ三期患者ノ外ハ皆再ビ上昇シテ居リマス。是ハ健康者ニ就テ調べタル我國ノ海軍ノ成績モ同様デ四月ガ最高九月ガ最低トナツテ居マス。鈴木君ノ表(第四十四

ヲ行タ寺尾君ノれ號舎ノ患者ニ就テ各週ノ體重ガ前回ヨリ増シテ居タリ、減ジテ居タリシタ回数ヲ調査シテ見タノデアリマス。ソレニ依テモ體重ノ増加ヲ見タ回数ハ二月、一月等ニ多クアツテ八月、九月ニハ最モ少ク、減少ヲ見タ回数ハ七月、九月等ニ多クシテ、十二月、十月等ニ少クアリマス。

以上ノ記事ノ外ニ於テモ、一般ニ肺結核患者ノ寒季殊ニ一月二月頃ノ疾病經過、又ハソレノ後來ニ及ボス影響ノ良好ナルコトハ我々ノ多ク經驗スル所デアリマシテ、是ニ反シ暑季ノ經過又ハソレノ後來ニ及ボス影響ハ不良デアリマス。氣温、湿度ノ差ガソレノ主ナル原因デアリマセウ。故ニ夏季ニハナルベク患者ヲ涼シイ場所ヘ移スガ有利デアリマス。東京市療養所デハ暑季ニハ患者ヲ日中森林ノ中ニ移シマス。極ク近所デモ森林ノ中デハ室内(れ號舎)ヨリハ平均攝氏三度又ハ四度低クアリマス。殊ニ風ノアル日ニハ低クアリマス。

感冒問題、寒冷刺戟、竝ニ植物性神経系機能問題

開放療法ノ可否ガ問題トナリマスルノハ冬季ノコトデアリマシテ、夏季ニハ獎勵シナクトモ自然ニ行ハレマスガ、ソノ冬季開放療法ノ恐レラレル第一ノ理由ハ感冒ノ心配デアリマス。感冒ハ吾々モ固ヨリ非常ニ恐レルノデアリマスガ、併シソノ爲ニ開放療法ヲ中止スルトイフノハ全ク謂ハレナキコトデアルト考ヘマス。或ハ加之恰度逆ニソノ爲メ開放療法ヲ行ツテ感冒ニ對スル鍛鍊 (Joliation) ヲナスノデアルトモ考ヘマス。

感冒ハ恰度結核ト同ジ方向ヘ身體ヲ弱メルモノデアツテ、結核ノ罹患率ヲ増シ、又ハ病竈ノ擴大ヲ來シ、又ハ治癒ヲ遷延セシムルモノデアリマス。

感冒ハ結核ト同一ノ臟器ヲ害スルモノデアツテ、即チ共ニ氣道、肺臟ヲ害シ、温中樞及其他ノ神経系細胞ヲ害シ、皮膚ヲ害スルモノデアリマス。感冒ハ又鼻、口腔、氣管等ノ淋巴系モ侵シマス。又結核ニ對スル抵抗力ヲ減退セシメテ「ツベルクリン」敏感度ヲ減降シ、睡レル結核ヲ眼醒マストモイハレテ居マス(同様ノ現象ハ月經ヤ妊娠デモ起ルトイヒマス)。兔ニ角感冒ハ結核ト同ジ方向ヘ身體ヲ弱メルモノデアツテ、結核ノ罹患率ヲ増シ、又ハ病竈ヲ擴大シ、又ハ治癒ヲ遷延セ

兎シムルコトハ争ハレナイ事實デアリマス。

肺結核患者ハ由來非常ニ感冒ニ罹リ易イモノデアリマスガ、既ニ肺結核發病以前カラソウイフ傾向ガアツテ、其中ニ肺結核發病ガ明ニナル如キ例モ少クアリマセン。是レハ感冒ニ對スル抵抗力ノ増進ガ結核ノ豫防法トシテモ治療法トシテモ極メテ必要ナル所以ヲ暗示シテ居ルモノデアリマス。

感冒ハ身體ノ冷却ニ原因シテ發スルモノデアリマス。身體ノ冷却ノミデモ加答兒ガ起リ得ルトイヒマスガ、一層多イノハ是ニ傳染ノ續發スルモノデアリマス。併シ此身體ノ冷却ト傳染トノ關係ニ就テハマダ説ガ一定シテ居リマセンガ、兎ニ角感冒ノ傳染ヲ避ケル工夫即チ感冒患者ニ接近セヌヤウ注意スルコトハ肺結核ノ一般療法トシテハ肝要ナ事項デアリマス。感冒ニ對スル抵抗力ノ増進法ハ身體ノ鍛鍊 *Abhärtung* デアリマスガ、是ハ凡テ寒氣ノ應用ニ依テ行ハレルモノデアリマシテ、冷水浴、空氣浴等種々ノ方法ガアリマス。「スポーツ」モ鍛鍊ノ效果ガ大デアルトイハレテ居リマス (*Butt* 氏)。何レモ寒氣ヲ以テ皮膚ヲ刺戟スルガ要點デアツテ、體操ナドモ裸體デ行フガ有效デアリマス。私ノ呼吸體操モ裸體デ行ハセテ、皮膚鍛鍊ニハ殊ニ重キヲ置イテ居リマス。

肺結核患者ノ開放療法モ感冒ニ對スル抵抗力増進法即チ一種ノ鍛鍊法ト見ルコトガ出來マス。開放療法ニ於テハ患者ハ意外ニ感冒ニ罹ラナイモノデアアルトイフコトハ前ニ述ベタ所デアリマスガ、抑モ感冒ハ暖カイ所ニ居テ急ニ寒氣ニ觸レル時起リ易キモノデ、常ニ寒冷ノ所ニ居レバ感冒ニ罹ルコトモ少イノデアリマス。是レニハ種々ノ實驗上ヤ經驗上ノ説明モ下サレテ居リマス。殊ニ肺結核療養所ハ其特徴トシテ第一ニ物理的療法ヲ實行スル所デアリマシテ、患者ヲシテ感冒ニ罹ラナイヤウニ開放療法ヲ實行セシムル所デアリマスカラ、ソレニハ最モ熟達シテ居ナケレバナラナイ筈デアリマス。加之吾々ハ治療法トシテ寒冷刺戟ヲ適當ニ應用シテ見ルコトニ大ナル興味ヲ持テ居ルモノデアリマス。感冒ニ對スル鍛鍊ハ大體ニ申シマスレバ、寒氣ニ遭フ際皮膚血管ガ敏速ニ收縮シテ體溫ノ放散ヲ防グコトデアリマシテ、是ハ植物性神經系ニ屬スル交感神經系ノ作用ニ依ルモノデアリマス。即チ脈管運動神經ガ緊張 *Tonisieren* サセラレルノデアリマス。故ニ身體鍛鍊ノ實行ハ交感神經系ノ體操トモイハレテ居リマス。

肺結核患者デモ次第二薄着ノ習慣ヲ付ケタリシテ、全身のニ寒冷ノ作用ヲ受ケシメ、感冒ニ罹ラナイヤウニ漸次ニ練習ヲ積マシムルコトガ出來レバ鍛鍊ノ效果ハ少クナイノデ、開放療法ニ依テハ此通常ノ全身の皮膚刺戟ノ機會ノ得ラレ易イトイフコトモアリマセウガ、ソレ以上何等カ特殊ノ關係デ有效ニ身體鍛鍊ノ出來ル理由ガアルカヲ考ヘマスルニ、該療法ニ於テハ通常身體ハ能ク布圍又ハ毛布デ被フテ寒クナイヤウニシ、唯頸部以上顏面頭部丈ケヲ寒イ所ヘ出シテ居ルノデアリマス(特別ニ日光浴、空氣浴ヲ行フ患者ハ別トシテ)。故ニ直接寒氣ニ觸レテ居ル皮膚ハ寒冷ノ作用ヲ受ケルコトハ明カデアツテモ、ソレハ通常頸部以上頭部丈ケデアツテ、他ノ體部ニハ直接ノ影響ハナイ筈デアリマス。併シ間接ニハ全身ニ大ナル作用ヲ及ボシ得ルモノト考ヘマス。其理由トシテ考察シマシタ點ヲ左ニ述ベテ見マセウ。

皮膚ハ一部分ガ溫マリ又ハ冷エマスルト全身ニ冷溫ノ感ジヲ起シマスルコトハ炎暑ノ候ニ手ダケヲ冷水中ニ浸シテ全身ノ涼シキヲ覺エ、嚴寒ノ際ニ手ダケ火鉢ニ當リテ全身ノ溫暖ヲ感ジマスルコトニ依テモ分リマス。而シテ人ガ溫暖ヲ感ジ又寒冷ヲ覺エルハ主トシテ皮膚ノ溫度ニ依ルモノ故、是レハ全身ノ皮膚ニ影響ヲ與ヘタルモノト考ヘルコトガ出來マス。熱ノアル小兒デハ皮膚ノ一部ヲ冰囊デ冷ヤシタダケデモ實際ニ腋窩等ノ體溫ノ下降スルヲ認メラル、コトモアリマス。斯ル現象ハ血液ガ冷エ又ハ溫メラレルトイフコトニモ關スルカモ知レマセンガ、主ナルハ反射的ニ脈管運動神經ガ收縮スルニ因ルモノト考ヘタ方ガ可イト思ハレマス。凡テ寒冷ノ皮膚ニ對スル作用ニハ局所作用ト遠隔作用トガアリマシテ、上記ノ如キ作用ハ其後者ト云テ宜シイ。

次ニ氣道粘膜ノ關係ニ就テ考察シマスルニ上部氣道即チ鼻以下聲帶迄又ハ更ニ上部氣管ノ邊迄位ハ直接ニ寒冷ノ空氣ニ接シテ、寒冷刺戟ノ作用ヲ受ケルコトハ明カデアリマス。即粘膜ノ血管ガ寒冷ノ空氣ニ遭テ收縮シ溫ノ放散ヲ防グヤウニスル譯デアリマス。粘膜血管ノ收縮ノ考ヘラレタ例トシテハ溫カキ濕ツタ空氣ト寒冷ナル乾イタ空氣トヲ交互ニ吸入セシメテ脈管神經ノ練習ヲサセ粘膜鍛鍊ヲ試ミタトイフ報告モアリマス。通常吸氣ハ上氣道デ溫タメラレテ肺胞内ヘ送ラル、モノ故、氣道ノドノ位ノ部分迄吸氣ノ直接寒冷作用ガ及ブカハ別デアリマスガ、兎ニ角上氣道ニ就テハ血管ノ收縮即チ脈管運動神經ノ緊張ガ考ヘラレマス。

次ニ寒冷ノ遠隔作用ノ例トシテハ手足ガ寒氣ニ當ルト、鼻加答兒ヤ氣管枝炎ガ起リ、鼻ガ詰ルコトハ周知ノ事實デアリマス。感冒ノ原因乃至寒冷ノ氣道ニ對スル作用ニ就テ先人ノ言ヘル説ニ、寒氣ガ直接氣道ニ作用スルノハ左程危險デハナクシテ、ソレヨリハ皮膚ガ冷却サレテ間接ニ作用ヲ受ケルトイフ場合ノ方ガ影響ガ大キイト言テ居マスガ、之ハ自分ノ經驗デモ確カニソウ思ハレマス。皮膚ト氣道粘膜トハ蓋シ反射機能ヲ以テ互ニ大ナル影響ヲ及ボスモノデアリマスカラ、氣道粘膜ガ直接寒冷ノ作用ヲ受クルトキハ全身ノ皮膚ニモ反射的影響ヲ及ボスデアラウトイフコトハ察セラレ易キ所デアリマス。冬季ノ開放療法ニ於テ喀痰ノ分量ノ減少スルコト、呼吸器ノ加答兒ガ肺結核ノ感染又ハ蔓延ニ不利デアルコト、滲出物ノ多イ肺結核(所謂滲出性肺結核)ノ豫後ノ不良ナルコト、肺臟内ノ血流速度ノ遅イノガ不利デ、迅速ナルガ有利ナルコト、essentielle Hypertonieニ肺結核ノ起リ易カラズ蔓延シ易カラザルコト等種々ノ所見ヤ諸家ノ説ヲ列擧シテ見マスト呼吸器粘膜血管ノ緊張ガ有利ナルコトハ察セラレ易イ所デアリマス。

寒冷ノ季節ニ於テ血管ノ緊張増加シ、心臟力ノ増大スルコトハ第四十三表ニ依テモ明カナ所デアリマスガ、之レハ肺結核死亡率又ハ症狀消長ノ冬季ニ安全デ、夏季ニ危險デアルコトト相竝行スル事實デ、又決シテ偶然ノ一致デナイコトト考ヘマス。

結核患者ニ於テハ植物性神經系殊ニ交感神經系ノ反應力ノ減弱スルコトハ多ク報告セラレタル所デアツテ、我東京市療養所ニ於テモ春木秀次郎君ガ結核患者ニ於テ「ピルケー氏反應出現ノ強度ト「アドレナリン」ニ對スル敏感度トヲ併セテ檢シマシタガ、兩者ハ何レモ一期ノ患者ニ於テ最モ強度デ、二期、三期トナルニ從ツテ次第ニ減弱シマス、然シ一期ノ患者デモ「アドレナリン」ニ對スル敏感度ノ弱イモノハ「ピルケー氏反應モ弱ク、三期ノ患者デモ「アドレナリン」ニ對スル敏感度ノ強イ者ハ「ピルケー氏反應モ強度ノ陽性ヲ示ストイフ成績ニナツテ居リマス(第四十六表參照)。即チ此二者ハ大體ニ相併行スルモノデアツテ、「クロロム」親和系統ノ「トーマス」ト「アレルギー」トノ密接ナ關聯ガ想像セラレマス。兎ニ角結核ノ患者ニ於テハ交感神經系ヲ刺戟シテ其機能ヲ高メルハ大ナル意義アルモノト考ヘ、寒冷刺戟ノ成績ノ良好ナル理由ノ一ツヲ之ニ求メタイト思フノデアリマス。

寒冷刺戟ヲ以テ顔面及上氣道ニ作用セシムルコトハ感冒ニ對スル抵抗力増進ノ目的以外ニモ尙重要ナ意義ノ存スルモノ

第四十六表 ビルケー氏反應ト「アドレナリン」反應ノ對照

	+++	++	+	±	-	アドレナリン ニ對シテ ノ反應 ビルク 氏ハ
	0	0	1	3	0	-
	0	0	4	6	2	±
	0	0	2	1	1	+
	3	1	2	0	0	++
	2	3	0	0	0	+++

サレルコトモ、全身狀態ニ一定ノ好影響ヲ及ボスデアラウト思ハレマス。

冬季開放療法ニ依テ熱ガ下降シテ盜汗止ミ咳嗽、喀痰減ジ呼吸循環機能容易トナリ、氣分良好ニテ食慾ガ高マル等ノ諸效果ハ上記ノ諸理由カラ推測スレバ偶然ナ事デハナイ如クニ感ゼシメラレマス。

日光浴

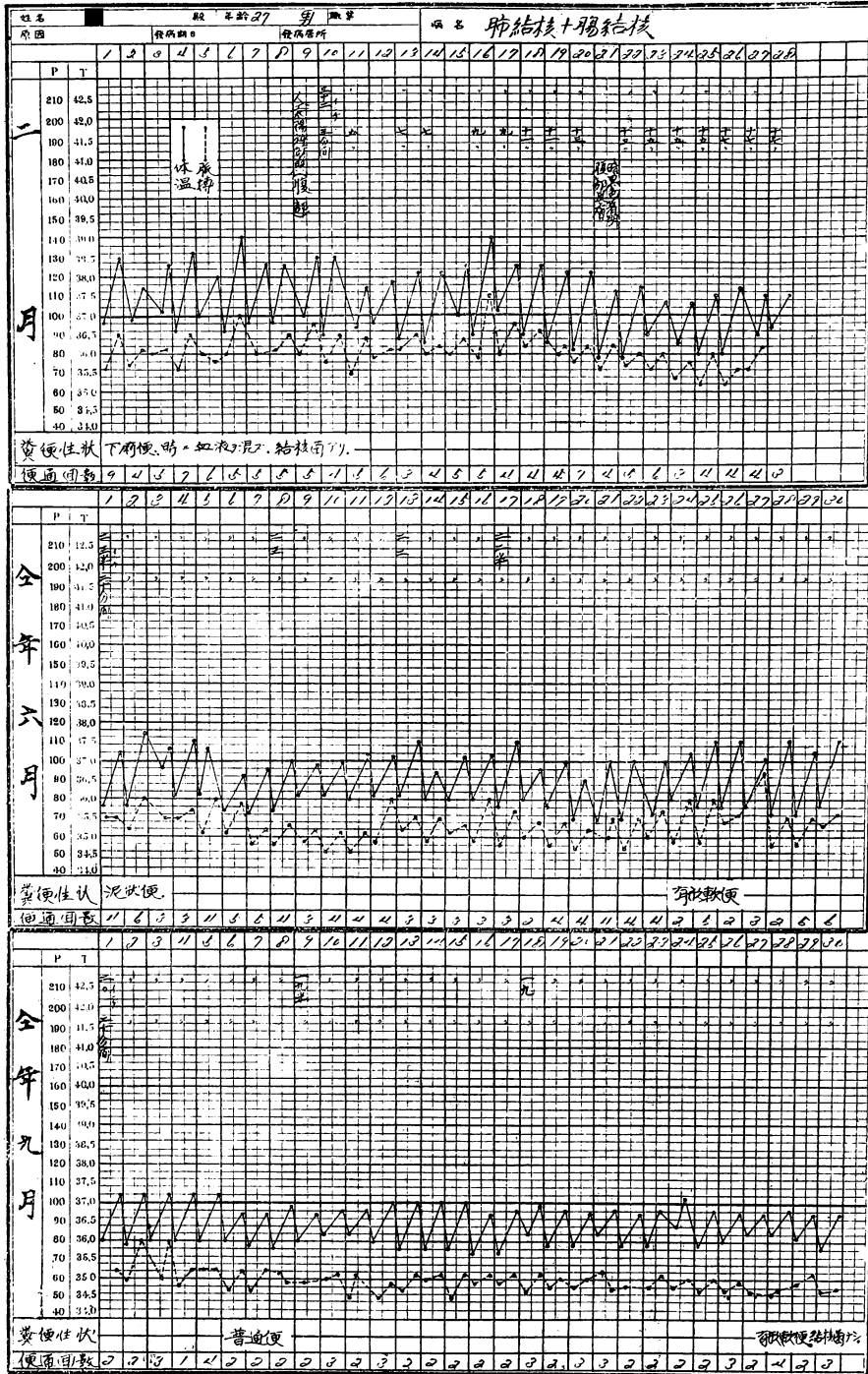
日光浴ハ強イ刺戟療法ノ一ツデ全身の刺戟モ局所の刺戟モ亦病竈の刺戟モ與ヘルモノデアリマス。

日光浴即チ裸體ヲ日光ノ直射ニ當テルコトハ夏季ハ行ハレ易イガ冬季ニハ困難デアリマス。併シ是レモ練習ニ依ツタリ裝置ニ依ツタリシテハ意外ニ容易ニ行ハレルモノデアリマス。寒イ室ニハ暖房ヲ設ケルトスレバ格別デアルガ、暖房ノ無イ戶外ニ於テモ東京附近デドノ位ノ直射溫度ガ得ラレルカハ建築物問題ノ條下ニ掲ゲタル樽ノ内部ノ溫度ニ依テ大體ヲ知ルコトガ出來マス。此樽ノ中ニテ冬季ニ毎日一時間半又ハソレ以上モ日光浴ヲシタ患者モアリマス。此患者ハ次第ニ

トイフコトヲ私カニ考ヘシメラレマス。ソレハ顔面及上氣道ニ寒冷刺戟ガ加ハルト、頸部交感神經節(或ハ尙最上部ノ胸部交感神經節)又ハ反對ニ中腦延髓ヨリ出ヅル副交感神經系ニ影響ヲ及ボシマスノデ、其作用ハ植物性神經機能ノ調節ヲ司ル間腦ニ及ブモノト考ヘラレマス。故ニ間腦ハ熱、呼吸血、壓、心動、血液分布、水及物質排泄及酸化等ノ體質ニ關スル諸要素ニ重要ナ意義ヲ有ストイフ *Allen* *Williams* 等ノ學派ノ說ヲ參酌シテ考ヘルト、耐寒療法ガ是等ノ重要ナル諸機能ニ一定ノ作用ヲ及ボシ得ルコトハ考ヘラレ易キ所デアリマス。又寒冷ノ空氣ヲ吸入シテハ溫暖テ呼出スルコトニ依リテ、體溫ノ放散ガ促

第 四 十 七 表

原著 田澤 II 肺結核ノ一般療法



日光浴ニ慣レ自ラ進ンデ是ヲ實行シ、樽ノ裝置無キ時ハ中庭(樽外)ニテモソレヲ實行シテ居マシタ。私ハ先年瑞西デ
 氏ノ立派ナ日光浴ノ成績ヲ參觀シマシタガ、ソレハ外科的結核デアリマス。肺結核デモ適當ノ例ニハ日光浴ガ應
 用サレマスガ、餘程六ケシイ問題デアリマスカラ別ノ機會ニ讓リマス(第四十七表人工太陽燈射照病例)。
 人工太陽燈ヲ結核患者治療ニ應用スルコトハ多ク行ハレル所デアリマスガ、上表ハ腸結核症狀ノ是ニ依テ快癒シ肺結核
 三期ノ進行セルモノ、存在スルニ拘ハラズ熱候去リ普通便トナリ糞便中ノ結核菌陰性トナリ榮養恢復シテ病狀一變セル
 病例デアリマス。

建築物ニ就テ

建築物ハ外界氣象ノ身體ニ對スル作用ヲ緩和又ハ除去シテ生活ヲ氣持チ好クスル爲ニ發達シタルモノデアル故ニ、建物
 (殊ニ暖房裝置ノ完全ナ建物)内ノ生活ニ慣レタ者ヲシテ開放療法ヲ行ハシメントスレバ、平素トハドノ位相違シタ粗ナ
 ル氣象ニ接觸スルコトニナルカドノ位氣象的刺戟ガ大トナルカ換言スレバ平素ノ生活デハドノ位建物ガ氣象ヲ緩和シツ
 ツアルカニ就テ、明瞭ナ觀念ヲ持テ居ルコトガ必要デアリマス。是レニ關スル成績ノ一二ヲ左ニ掲ゲテ見マセウ。
 開放療法ノ條下ニ述ベタルれ號舍及其ノ臥堂(同條下參照)ハ、板圍ヒ丈ケノ「バラック」建物デ、窓ヲ全部取外シ又ハ開
 放シテ、吹放シニナツテ居リマシテ、火鉢、「ストーブ」等ハ入レテアリマセン。アノ(一)れ號病舍及(二)臥堂ノ中ト、(三)
 れ號病舍ト同一種ノ「バラック」建物ニテ、窓ノ開放ノ少シク是レヨリ少イよ號舍ノ中ト(四)本所中庭トニ於ケル寒冷季
 節ノ氣象ヲ第四十九表ニ掲ゲテオキマス。

第四十八表 氣溫及比較濕度(比濕)表 (自大正十五年一月一日 至同 年一月十日)

調査事項	最高氣溫(攝氏)右		最低氣溫(攝氏)左		平均氣溫(攝氏)		最高比濕度右		最低比濕度左		平均比濕度	
	場所	一月	場所	一月	場所	一月	場所	一月	場所	一月	場所	一月
れ號舍	室內	れ號舍	室內	れ號舍	中庭	れ號舍	室內	れ號舍	臥堂	中庭	れ號舍	室內
	臥堂	中庭	れ號舍	臥堂	中庭	れ號舍	臥堂	中庭	れ號舍	臥堂	中庭	中庭
	中庭	れ號舍	臥堂	中庭	れ號舍	臥堂	中庭	れ號舍	臥堂	中庭	中庭	中庭

一日	10.0 —3.3	9.5 —4.9	11.3 —6.5	10.0 —7.0	4.5	3.5	4.2	2.2	67.7 21.9	93.0 25.7	96.5 49.5	100.0 44.0	48.7	73.1	76.7	73.0
二日	15.0 —1.5	14.7 —2.5	16.2 —3.6	15.0 —5.0	10.1	9.9	11.0	9.0	66.0 41.0	6.4 45.5	65.0 36.3	81.0 44.0	55.5	55.2	52.6	57.5
三日	9.5 —0.5	8.5 —1.0	7.5 —2.0	10.0 —6.0	3.2	2.6	2.9	1.2	67.3 50.0	77.7 51.0	78.1 50.0	90.4 48.4	57.8	65.5	64.5	68.7
四日	10.0 —3.5	10.2 —5.2	12.5 —6.6	11.0 —8.0	4.7	4.3	8.0	2.7	69.5 45.0	78.2 44.1	90.9 56.3	100.0 18.2	57.1	61.1	62.7	52.5
五日	8.5 —2.0	7.7 —4.5	7.7 —5.0	8.0 —7.0	4.7	3.6	6.2	0.7	96.3 55.1	91.3 56.2	95.4 63.0	90.6 84.0	71.8	77.1	80.0	87.3
六日	8.0 1.8	8.3 0.8	10.2 0.4	9.0 —2.0	5.5	4.7	5.5	4.4	83.1 47.0	69.1 39.0	86.0 57.2	78.5 49.0	60.5	53.5	57.1	58.4
七日	8.5 —3.0	9.2 —5.0	11.5 —6.2	10.0 —8.0	3.6	3.3	3.6	1.7	53.0 46.0	84.1 37.0	87.2 25.0	98.5 37.0	53.1	68.2	59.4	66.0
八日	9.0 0.3	6.8 —2.8	9.0 —4.2	8.0 —5.0	4.2	3.3	4.1	2.7	63.0 44.0	95.8 55.3	84.6 49.7	100.0 36.0	54.5	73.6	67.4	72.3
九日	10.0 0.3	8.3 —1.0	9.8 —1.8	9.0 —1.5	5.6	4.6	5.1	4.4	63.0 48.0	77.2 53.0	66.7 48.4	64.0 51.5	55.7	65.0	56.0	56.2
十日	10.5 1.5	11.1 0.5	13.0 —0.2	11.5 1.0	7.6	6.2	6.5	5.5	53.9 47.3	71.5 49.0	67.3 46.3	68.8 40.0	50.9	61.6	56.3	54.2

註 本表ニ掲ケタル事項ハ午前六時、十時、午後三時、七時ニ測定シタルモノニシテ平均價ハ四回ヲ平均シタルモノナリ。

此表ニ依テ如何ニ窓ノ多イ建物デ、戸障子ヲ取り外シテ最大限度ニ近ク開放シテモ、臥堂ヨリハ著シク外界ノ氣温、湿度ガ緩和サレルトイフコト、及同一ノ粗悪ナル「バラック」建物ニテモ窓ノ開放程度ノ多少ノ差ニヨリテ、氣象ノ緩和サレ方ガドノ位違フカトイフコトガ分リマス。ソシテソノ緩和ハ主トシテ最高最低氣温ト最高湿度ガ何レモ其度ヲ減ジテ、氣温湿度ノ動搖ガ減少スルト云フ事ニ在リマス。從ツテ平均數ニシテハ必ズシモ一定ノ注目スベキ成績トハナリマセン。建物ガ開放シテアルト寒季デモ最高氣温ガ高クナルノハ日光ノ影響ヲ直接ニ受ケルカラデアリマス。

次ニ建物ノ氣象ヲ緩和スル作用ヲ試験スル模型トモ見ラルベキ觀測成績ヲ述ベマス。是レハ某氏ヨリ東京市療養所へ御寄附ヲ得マシタル大樽(口ノ直徑六尺五寸、底ノ直徑六尺二寸、深サ五尺五寸)ヲ冬季ノ日光浴用トシテ應用シタモノデ、其樽ヲ横タヘテ安置シ、太陽ノ運行ニ連レテ十五分間毎ニ樽ヲ回轉シ、一日中絶エズ樽ノ縦軸ト光線ノ方向ト一致セシムルヤウニ、日光ヲシテ樽ノ中ヲ直射セシメ(樽ノ底面ノ半分位ハ射照ス)、ソノ樽ノ縁(入口)ト底部(突き當リノ部)トニ於テ直射日光ノ溫度ト濕度トヲ測タノデアリマシテ、上表ノ如キ成績ヲ得マシタ。

第四十九表 樽内外ニ於ケル一日平均溫度及濕度

樽内		樽外		調査事項	一月
溫度(攝氏)	濕度(%)	溫度(攝氏)	濕度(%)		
一一・〇	四一・五	七・〇	四二・四	二十二日	二十二日
一八・〇	四二・一	八・五	六九・五	二十三日	二十三日
一九・〇	三九・六	九・〇	六六・九	二十五日	二十五日
二二・〇	四六・九	一一・〇	五一・六	二十六日	二十六日
一八・〇	四八・〇	一〇・〇	六一・二	二十七日	二十七日
一七・八	四三・七	九・一	五八・三	平均	平均

(日光浴ノ條下ノ寫眞参照)是レニヨルト我々ハ樽ノ内外(家屋ノ内外ニ比適ス)ハ

割合ニ大ナル差ノアルモノダト思ヒマス。平均氣溫ニ於テ十度又ハ十一度、平均比濕ニ於テ二七%以上モ違フ日ガアリマス。又一日各時ノ氣溫ニ於テハ日中ニハ十四度、十四度半モ違ヒ、比較濕度ニ於テハ四十六%モ相違スル時ガアリマス。

第五十表 樽内外氣溫及濕度比較表(大正十五年一月二十二日調査)

場	樽内	氣溫	濕度	觀測時間	調査事項
	43.0	3.5°C		午前八時	分十三
	54.0	9.5		同	分五十四
	69.0	12.5		午前九時	分五
	56.0	15.0		同	分十
	60.0	15.0		同	分十三
	53.0	16.5		同	分五十四
	50.0	17.0		午前十時	分五
	45.0	19.5		同	分十
	46.0	20.0		同	分十三
	42.0	21.5		同	分五十四
	42.0	21.5		午前十一時	分五
	41.0	21.0		同	分十
	41.0	23.5		同	分十三
	41.0	23.0		同	分五十四
	37.0	24.5		正午	
	34.0	23.0		同	分五
	27.0	24.5		同	分十三
	26.2	21.0		同	分五十四
	25.0	17.0		午後一時	分五
	25.0	17.0		同	分十
	31.0	19.5		同	分十三
	35.0	17.5		同	分五十四
	21.4	18.0		午後二時	分五
	12.8	18.0		同	分十三
	22.0	17.5		同	分五十四
	24.1	18.0		午後三時	分五
	22.0	17.5		同	分十
	27.0	19.5		同	分十三
	27.0	19.5		同	分五十四
	24.0	18.5		午後四時	分五
	24.0	18.0		同	分十
	31.0	16.0		同	分十三
	47.0	11.5		同	分五十四

所		外		樽	
		度	濕	溫	氣
天候	朝來快晴ニシテ西北風稍、強ク寒シ	63.0		2.0	
		56.0		2.5	
		82.0		2.9	
		53.0		5.0	
		91.0		5.0	
		69.0		6.0	
		76.0		6.5	
		64.0		7.5	
		92.0		7.5	
		85.0		8.5	
	79.0		9.5		
	72.0		9.0		
	85.0		9.0		
	72.0		9.5		
	67.0		10.5		
	62.0		11.5		
	62.0		11.0		
	67.0		10.5		
	56.0		10.5		
	49.0		10.0		
45.0		10.5			
50.0		10.5			
43.0		11.0			
35.0		10.5			
41.0		11.0			
40.0		10.5			
40.0		10.5			
38.0		11.0			
50.0		10.5			
49.0		10.0			
43.0		9.5			
39.0		7.5			
42.0		6.0			
	快晴ナルモ風稍、衰フ				

上表ノ如ク樽ノ底部ト入口トニ於テハ氣溫濕度ニ著シキ差ガアリマス。樽ノ内部ハ餘程溫度及乾燥度ガ高クアツテ、コノ中ニ横ハリ居レバ嚴寒時ニモ隨分日光浴ガ行ヒ易イノデアリマスガ、斯クノ如ク樽ノ中ガ暖カデアル原因ハ第一ニハ樽ノ外ニ比シテ風ノ少イコトデアリマス。故ニ冬期モ風ヲ避ケル裝置ヲシテ日光ノ直射ダケヲ取ルト、ドノ位ノ溫度ガ得ラレルカノ實際ガ上表ニ依テ示サレテ居ルモノデアリマス。樽ノ中デハ濕度ガ下降シテ乾燥シテ來ルコトモ著シクアリマス。我々が此表ノ數字ヲ患者ニ示サズニ觀察シテ居マシタ所三月頃ニナツテカラハ患者ハ口ガ渴シテ長ク中ニ寢テ居ラレナイト訴ヘマシタ。太陽ヲ雲ガ被ツタ時又ハ加之極ク薄イ霞ノヤウナ雲ガ被タダケデ日光ノ直射ガ少シ弱ク見ユル位ノ時デモ外ノ溫度ハ餘程下降シテ參リマスガ、併シコノ時ハ樽ノ内部モ溫度ガ下ル筈デアリマスカラ、大體ニ樽ノ外部ノ溫度ガ内部ヨリ低イトイフ事ノ主要ナル原因ハ風デアルト考ヘマス。樽ノ外トイフテモ、ソレハ中庭デ相當ニ風ノ遮ラレタ所デ、稀ニハ寒中ニ此所ヘ出テ裸體日光浴ヲシテ居ル者モアル所デスガ、ソレデスラ上記ノ如キ差ヲ起シマスカラ、モツト吹き放シノ所デアツタラバ、樽ノ中又ハ建物ノ中ト比較シテ可ナリノ差ノアルモノト思ハレマス

上記ノ樽ノ成績カラ推測シテ、家屋ガ溫度濕度ヲ調節スル程度ニ就テモ大體ノ觀念ハ得ラレマスガ、更ニ進デ考ヘルト窓ノ硝子戸ノ開閉ノ程度ニ依テ溫度ヤ濕度ガ調節サレルコトノ大ナルモ考ヘ易キ所デアリマシテ、之ニハ Schröder 氏ノ成績ナドモ面白イ曲線デ發表サレテ居リマス。

樽ノ中ト外トニ於ケル氣溫濕度ノ上リ下リノ動搖回數ヲ比較シテ見マスト、第五十二表ノ如キ成績デ、即チ樽ノ外ハ動

第五十一表 樽内外ニ於ケル氣温ノ動搖回数表

温度ノ差	攝氏		華氏		月日	
	内	外	内	外	内	外
〇—一〇度	降	昇	一	一	一月二十二日	一月二十三日
	三	三	六	五	一月二十三日	一月二十五日
一—二〇度	降	昇	二	三	一月二十五日	一月二十六日
	三	四	二	一	一月二十六日	一月二十七日
二—五〇度	降	昇	四	六	一月二十七日	平均
	六	六	四	六	平均	平均
五—一〇〇	降	昇	五	四	平均	平均
	四	四	〇	〇	平均	平均

風向又ハソノ強弱ハ氣象學上ニ使用セル意味ニアラズシテ單ナル俗語ナリ。

搖ガ多イガソレハ小ナル動搖デアツテ、大ナル動搖ハ樽ノ内部ガ多クナツテ居リマス。之ハ樽ノ内部ハ温マリ居ル故冷
 タキ風デモ吹込メバ急ナ下降ヲ來スコトガ多イトイフ意味デアリマス。

氣温ノ大ナル動搖ハ却テ樽ノ内部ニ多イトイフ事實カラ考ヘルト、室内(樽内ニ當ル)ニ比シテ戶外生活ガ割合ニ感冒ヲ
 起サナイトイフコトモ理解サレマセウ。感冒ハ温ツタ者ガ急ニ寒氣ニ遭フ時ニ罹ル病氣デアルカラデアリマス尙又樽外
 ハ小ナル動搖ノ多イトイフコトハ刺戟療法トシテ應用シ易イトイフコトヲ示スモノデ、少クトモ大ナル動搖ヨリハ用ヒ
 易イ筈ト考ヘマス。

患者ヲシテ開放療法ヲ行ハシムルニ當テハ戶外ノ氣象ニ就テドノ位平常ノ習慣タル屋内生活ト違タ状態ニ患者ガ置イテ

アルカニ就テ纏々概念ヲ持テ居ルコトガ必要デアルト考ヘマス。我々ハ前ニ述べタレ號舍臥堂ノ患者ハ上記ノ樽ニ當テハメルト底部ト入口トノ中間ヨリハモツト外部ニ近イトイフ位ナ所ニ居ルモノト考ヘ、可ナリ強ク大氣ノ影響ヲ受ケテ居ルモノト察シテ居マス。

次ニ結核療養所ノ建物ニハ開放療法用ノ「ベランダ」ハ是非必要デアラウカ、日本デハ吹き降りガ多イ故此「ベランダ」ニモ是非硝子戸ヲ付ケテ置クコトガ必要デアラウカ。其戸障子トシテハドンナ式ガ適當デアラウカ等ノ問題其他通風採光ニ關スル二三ノ考察ヲ述ベテ見マセウ。

東京市療養所ニ於テハ今日迄ニ恰度三回病院建築ニ就テ實地工夫ヲメグラス機會ヲ得タノデアアルガ、其第一回ノ病舎建築ニ當テハ費用ノ關係ニテ建坪ガ制限セラレテ「ベランダ」ヲ設クルコトガ出來ナカツタノデ窓ヲナルベク多クシ且ツ總テノ窓ニ廻轉窓ヲ付ケテ満足シテ居マシタ。尤モ初メノ設計デハ二棟ノ二階建病舎ニダケ「ベランダ」ヲ付ケタノデアアルガ、之レハ半成ノ時暴風ノ爲倒潰シタノデ、其後ハ他ノ病舎ト同一ノ式ニ改メテ費用ヲ節スルコト、ナリマシタ。ソシテ當時我々ハ病室内ノ通風採光ニハ「ベランダ」ノナイ方ガ完全デアルカラ一得一失トモ考ヘマシタ。

其後實際ノ運轉ヲナシツ、考察シテ見ルト多數ノ患者ヲ一室ニ收容スル病舎デハ原則トシテハヤハリ「ベランダ」ヲ備ヘテ温カキ病舎ト區別シテ置クコトガ必要ダト考ヘラル、ニ至タ。但シ其温カイ病舎トイフハ運轉法如何ニ依テハ左程廣クナクトモ可イ又病症輕重ノ程度ニ依テモ大サヲ加減シテ可イト考ヘラレル。必ズシモ大キナ室ハ要シマセン。

嚴寒ノ候ニ開放療法實行中ノ患者ニ就テ温暖ノ室ヲ要スルヤ否ヤ又之レヲ要スルハ如何ナル場合ナルカモ、調査シテアリマスガ、細カイ問題ガ多イノデ、何レ又別ノ機會ニ述ベルコトニシマス。

日本人ノ生活法ハ簡單デアリ、更衣等モ面倒ガ少イカラ、必ズシモ温カイ室ガナクトモ、病舎全體ヲ「ベランダ」ノヤウニ考ヘテ居テモ、ソレデ絕對ニ行ハレナイトイフコトハナク、現ニ我々ノ所デハ今日迄ソナ調子デヤツテ來タノデアリマスガ、合理的ニトイヘバ是非兩者ヲ區別シタ方ガ宜シイ。當療養所デハ將來ハ「ベランダ」ノナイ今迄ノ木造病舎ヲ輕症室ニ當テ、病舎全體ヲ「ベランダ」ノ代ハリニ用ヒ、食堂一室(比較的小室)丈ケヲ温カクシテ置クト適當カト考ヘマ

。即チ從來「ベランダ」トシテ考ヘラレタトハ全ク別ノ考ヘ方デ主副取代ヘタ考方デアリマス。

今回東京市ガ三菱合資會社長岩崎男爵ノ寄附金ヲ基礎トシテ鐵筋「コンクリート」ノ永久的建築ヲ致シマスルニ當テハ最重症患者收容ノ小室ノ外ハ「ベランダ」ヲ附ケマシタ。

「ベランダ」トシテ理想的ナモノトイヘバ南側ダケハ窓ノ全ク無イノガ可イト思ヒマス。併シ日本デハ吹キ降りガアルトノ理由デ硝子窓ヲ必要トスルトイフ説ガ一般デアリマスガ、我々ノ今日迄ノ經驗デハ輕症者ガ徹底的ニ開放療法ヲヤラウトイフナラバ、是非之ヲ要スルトイフ日ハ一年中ニモ餘リ多クハアリマセン。我々ノ所ノ從來ノ臥堂ハ窓ガナクテ庇ニ日除ケ雨蔽ヒノ布ガ取付ケテアツテ、前下方ヘ下ロスヤウニナツテ居リマスガ、日除ケ以外ニ之レヲ用フル必要ノアルコトハ雨ノ降り込ム時ダケ位デ雪ナドデハ其必要ハ甚ダ少クアリマス。

風ニ對シテハ屏風ナドヲ用フルト都合ノ可イコトモアリマス。兎ニ角風ハ能ク避ケラル、ヤウ建築上ニ注意シ置ク必要ガアリマス。

「ベランダ」ノ前ニ付ケル硝子窓ハ日本ノ障子雨戸ノ式ニシテ置イテ、不用ナ時ハ一方ヘ寄セ置クコトノ出來ルノガ開放療法ニハ最モ可イト考ヘマス。之ハ併シ建築上カラハ必ズシモ賛成サレズ東京市療養所ニ於テモ他ノ式ニナリマシタガ、實際ニ當テハ種々ノ條件ニ基イテ考察セラル、カラデアリマス。

開放療法ニ於テハ空氣ノ流通トイフバカリデナク、普通ノ硝子障子ヲ通ラズニ日光ノ射入スルコトガ餘程意味ガアラウト考ヘマス。紫外線ハ普通ノ硝子ヲ透過シナイトイハレルカラデアリマス。普通ノ開放療法デハ假令日光浴ノ場合ノ如クニ日光ノ直射ハ受ケナクトモ、若干ノ紫外線ハ其處ヘ射入スルモノト見レバ其刺戟作用ヲ利用スルコトハ開放療法ノ目的ヲ完全ナラシムル所以デアリマセウ。

病室トシテモ、住宅トシテモ廻轉窓ハ重要ナ設備デアリマスガ殊ニ開放大氣療法ヲ勵行シヤウトスルニハ是非トモ之ヲ備ヘチバナリマセン。下ノ窓ハ閉ヂテモ廻轉窓ダケハ明ケテ置クトイフコトニ依テ、如何ナル天候ニ際シテモ嚴寒時ニモ開放療法ガ實行シ得ラレルノデアリマス。廻轉窓ハ開放療法ノ理想カラ言ヘバ通常ノ下部ガ外ヘ開ク式ヨリハ上部ガ

外へ開ク式ニシタ方が合理的デアリマス。之ハ米國ニ居ラル、建築技師妻沼君ノ注意ニ依テ知タ所デアリマスガ、排氣ノ目的カラ云テモ、硝子ヲ通ラナイ光線ノ射入ノ目的カラ云テモ、ソレガ適當ト思ハレマス、唯雨ノ降り込マナイヤウニスル工夫ヲ要シマスノデ、實際ニ當テハ此理想カラ出發シテモ種々ノ變化ガ行ハレマセウ

私ハ先年米國旅行中最モ興味ヲ感ジタ建物ハマッサチューセツ州ノ Scharon 療養所(女子ト小兒ノ患者ヲ入所セシム)及其附近ノマッサチューセツツ、ホスピタルスクール(兒童ヲ入所セシム)デアリマスガ、印刷物ヲ全部大正十二年ノ震災時ニ焼失シマシタノデ記憶ニ從テ述ベマスガ、之レハ天井ヲ屋根裏ニ沿フテ張り、屋根ノ棟ノ所ニ廻轉窓ヲ附ケタモノデアリマス。之レハ人ノ呼出シタ空氣ガ暖カイ故輕クテ上層へ浮ブノヲ上方ヨリ逸出セシムル考案デアリマシテ、種々ノ實驗ニ依テ合理的ナルコトヲ示サレマシタ。日本家屋ノ破風ヤ船ノ通風筒ノコトヲ考ヘレバ當然ノコト、思ハレマス。此式ハ東京市養療所デモ震災後ニ建テタ二百數十名收容ノ「バラック」病舎ニ應用シテ大成功デアツタト考ヘテ居リマス。之レニハ大阪市ヨリ寄贈ノ組立「バラック」ヲ用ヒマシタガ、天井ガ低クアリマシタノデ前記ノ式ガ一層效ヲ奏シマシタ。暖房ノ關係ヲ基礎トシテ考案スルトキニハ全ク反對デ、寧ろ室ノ下部カラ空氣ノ逸出スルヤウニスルノガ目的ニ合致シマスガ、上記ノ方法ハ空氣ノ流通ヲ目的トシテ考ヘタモノデアリマス。

今回ノ鐵筋「コンクリート」病舎デハ平屋デナイノデ上記ノ天井廻轉窓ノ工事が困難デアリマスカラ煙突ノ裝置ヲ付ケルコトニシマシタガ、費用ノ關係デ少數ノ室ダケニ附ケマシタ。此式デハ其排氣孔ノ外へ開ク所ニ於テ風ノ室内へ逆ニ吹込マナイヤウナ裝置ヲ爲スコトガ最肝要デアリマス。

上記ノ天井窓及排氣孔等ノ作用ヲ檢セン爲メ炭酸瓦斯ノ測定ヲシテ其成績ノ良好ナルヲ見マシタ。(測定者藥劑士大井孝雄氏)。

窓ノ中デハ上ゲ下ゲ窓ハ開放療法トシテ使ヒ好イ場合ガ多クアリマス。障子ヲ下ゲテ上ヲ明ケテ置ケバ病牀へ直接ニ寒風ノ吹キ付ケルコトナクシテ上層ノ暖カキ空氣ハ外へ逃ゲ易イカラデアリマス、唯途中へ障子ノ骨ガ來テ目障リノ感ジガスルノト費用モ比較的多クヲ要スルトガ問題トナリマス。

榮養療法

食物ニ就テ當然第一ニ問題トナリマスハ「カロリー」ノ關係デアリマス。「カロリー」ノ不足スルガ不利デアルコト、身體ノ羸瘦ヲ來スガ惡徵デアルコトハ固ヨリ論ヲ俟タナイ所デアリ、相當ニ肥滿シテ榮養ノ佳良トナルコトハ固ヨリ良徵デアリマスガ、併シ何レノ時期デモ「カロリー」サヘ多量ニ與フレバ可イ、肥滿サヘスレバ可イ、トハイヘマセン。

過度ノ脂肪肥滿ハ糖尿病ノ原因トナルトノ説モアリマス故 (lipogenic Diabetes) 其點カラモ不利デアルガ、今一般療法實行上安靜ト運動ノ關係カラ考察シテ見マスルニ、餘リニ過度ニ肥滿シテ居ル者ハ日々何分間ト身體運動ヲ課スルニ當テモ心臟肺臟ヲ勞スルコトガ比較的大ニ失スル點ニ於テ目前ニ不利ノ起ルモノト考ヘマス。故ニ病勢ノ盛ナル時期ニハ體重ノ増加ハ主要ナ目標デアリマスガ、イクラデモ肥リ得ル時期ニ至レバ自然ニ一定ノ警戒ヲ要シマス。

結核患者ニドノ位ノ熱量ヲ與ヘテ宜シイカトイヒマスニ、最近 C. Rosenfeld ノ記載シタモノヲ見ルト、無熱ノ輕症患者デハ體重一疳當リ四〇「カロリー」位デ宜シイガ若シ之レデ不足ナル時ハ四五乃至五〇「カロリー」ヲ與ヘテバナラナイ、有熱デハアルガ相當ノ食慾ヲ有シ體重ヲ保持シテ居ル者ニ對シテハ四四乃至四七「カロリー」位ヲ與ヘテバナラストシテ居リマス。東京市療養所ニ於ケル春木秀次郎君ノ試験デハ(患者ヲ凡テ室内デ安靜ニシテ置イテ)、無熱カ或ヒハ僅カニ微熱アル輕症ノ場合デハ體重一疳ニ付キ四〇、四二、四五「カロリー」ヲ與ヘタモノハ皆體重ガ減少セザルカ或ハヤ、増加ヲ示シテ居リマスガ故ニ略々此位ノ熱量デ充分デアリマス。然シ進行性ノ有熱患者デハ四〇「カロリー」内外デハ體重ノ減少ヲ來シ四八「カロリー」ヲ與ヘタモノハヤ、體重ノ増加ヲ來シテ居リマス。是等ハ固ヨリ食品ノ種類、各個人ノ吸收利用率等ニヨリテ大ニ異ル問題デアリマスが大體春木君ノ成績モ Rosenfeld ノト一致シテ居リマス。

體重測定ニ就テ注意スベキ事項ノ一ツトシテ、一日中ノ各時ニ於ケル體重動搖ノ檢査成績ヲ左ニ掲ゲテ置キマス。左表ニ依レバ、大小便排泄ノ前後、食物攝取ノ前後及ビ入浴前後ノ關係ニヨリ、男女共平均三百匁内外迄ノ相違ヲ來シ得ル譯デアリマス。故ニ體重増減ヲ重要視スル結核療養ニ於テハ體重測定ノ時間ヲ一定スルコトガ理想的デアリマス。

第五十二表 健康者體重ノ日時動搖表

調査事項	早朝起牀排泄減		朝食		午後食		夕食		入、浴					
	小便後	大小便後	平均	人数	平均	人数	平均	人数	減	増				
看護婦	八四	九六	七四	一三二	一〇七	一五六	一〇一	一五七	二〇二	一六五	五二	四〇	五	二〇
男職員	一四	六〇	七	九六	一八	一五七	三四	一五〇	二〇	一八七	二五	二六		

我々ハ早朝起牀排泄ノ後トシタガ適當カト考ヘテ居マサガ、ソレハ併シ適宜ニ可然定メテ可イデセウ。

身體ノ榮養ニ就テ吾々ガ終局ノ目的トスル所ノモノハ肥滿ソノ物デハナクシテ、細胞ノ活力ヲ充實サセ、細胞ノ機能ヤ増殖力ヲ旺盛ナラシムルコトデアルト考ヘマスガ、此爲メニハ各種ノ榮養素中デ不足シタリ缺ケタリスルモノガアルノハ最不利デアルト考ヘマス。蛋白質、含水炭素及脂肪ノ三者ガ夫々適當ノ量ニ於テ含マル、コトヤ蛋白質及脂肪ガ比較的多イコトナドハ何人カラモ要求サル、所デアリマスガ、同時ニ鹽類ヤ「ビタミン」ノ如キ生理的ニ必要トセラル、モノガ、凡テ皆適當ノ量ニ於テ含マル、ヲ要スルコトハ明カデアリマス。其説明ノ一例トシテ「ビタミン」Bノ缺乏シタ場合ノ不利ナルベキ理由ヲ列舉シテ見マセウ。之ハ大正十一年四月京都ニ於ケル日清醫學社主催ノ結核講演會ニ於テ述べ又昨年ノ「結核」第一號ニモ掲ゲタ卑見ノ要點デアリマス。

動物ノ白米病試験ニ依レバ該病ハ甚シキ羸瘦衰弱ヲ來シテ死亡ニ至ラシムル疾病デアルガ、之レハ結核ノ經過ニ對シテ不利ナ影響ヲ與ヘザル筈ナキハ見易キ道理デアアル。又貧血ノ高度トナル疾患デアルコトモ結核ニ不利ナラザル筈ガナイ。

「ビタミン」B缺乏ハ新陳代謝上ノ疾患デアツテ、殊ニ血糖過多ヲ起シ易キ疾患ナルニ依テ結核ノ經過ニ對シテ不利ノ影響ヲ與フルコトガアラウ。

「ビタミン」B缺乏ハ胃液鹽酸ノ分泌減少ヲ來スコトモ榮養上不利ノ現象ナルコトハ固ヨリデアアル。

糠「エキス」ガ其生理的作用實驗ニ於テ腸ノ緊張ヲ高ムルコト及脚氣患者ニ與ヘテ糞便ヲ軟カクシテ快通セシムル效ヲ奏スルコト等モ榮養上神經機能上等ニ有利ナル筈デアアル。

結核患者ノ一般療法ニ於テハ身體ノ安靜ヲ嚴守セシメ充分ノ休養ヲトラシムルコトハ、最重要ナル治療項目ナルヲ以テ努メテ運動量ヲ減ゼザル可ラザルコトハ固ヨリデアアル。然ルニ「ヴィタミン」B缺乏ニ於テハ筋神經ノ緊張減退シテ運動力減弱スルヲ以テ、同一量ノ運動ニテモ疲勞的ノ影響ヲ與フルコト大ニシテ、安靜休養ノ目的ニ不利デアラウ。殊ニ心臟ノ衰弱ニ傾キ易ク、血管ノ弛緩ヲ來シ易キ結核ニ對シテハ、同症狀ノ顯著ナルヲ特徵トスル脚氣ガ、不利ノ影響ヲ及ボスベキコトハ考ヘラレ易イ所デアアル。結核デハ植物性神經機能殊ニ交感神經機能ノ減降ハ諸家ノ研究ニ依テ明カデアアルガ、脚氣デモ此所見ハ確實ナ事實デアアル。尙脚氣ニ於ケル所見デ茲ニ問題トナルモノハ熱デアアル。脚氣ノ熱ニ就テハ種々ノ説ガアルガ、吾々ハ先年入澤内科ニ於テ脚氣患者ノ治療試驗ヲ行フニ當テ、其病例トシテハ脈搏頻數ニシテ循環系症狀ノ著明ナルモノヲ選ンダガ、斯ル患者ノ多クハ皆多少ノ熱ヲ有シテ居タ。此熱候ハ糠「エキス」治療ニ依テ脚氣患者ノ脈搏數急ニ減少シ循環症狀ノ略々恢復シタ後ニ於テモ尙當分殘遺スルコトガ多イ。此殘遺シテ居ル熱候ニ就テハ之ヲ脚氣ソノモノ、症狀ト看做スコトハ困難デアアル。此熱候ト脚氣症狀發現ニ關スル考察ハ先年東京醫學會雜誌第三十六卷第九號ニ掲ゲテ置タガ、兎ニ角「ヴィタミン」B缺乏ニ依テ潛伏シテ居タ結核ガ活動性ヲ呈スルニ至タモノト思ハル、點ガ甚ダ多イ。

以上ノ諸項ヲ顧ミレバ「ヴィタミン」B缺乏ハ結核ノ經過ニ對シテ不利ナ影響ヲ與フベキコトハ察セラレ易イ所デアアルガ、結核患者ニ「ヴィタミン」Bヲ與ヘテ其效果ヲ批判セントスルニハ豫メ又知テ置カチバナラナイ事項ガアル。「ヴィタミン」Bノ作用ハ脚氣又ハ動物ノ實驗的疾患白米病ニ對スル治療の效果ノ所見ヨリ考察スレバ、「ヴィタミン」B缺乏ノ存在スルトキニ於テハ顯著デアツテ、脚氣ノ心臟症狀モ白米病ノ麻痺症狀モ共ニ甚迅速ニ恢復シマスガ既ニ充分「ヴィタミン」Bノ供給サレタ後ニハ引續キ之レヲ與ヘテモ著明ナ變化ハ起サナイモノデアアル。尤モ脚氣患者ニ於テハ急性症狀ノ治癒シタ後ニモ長ク糠「エキス」ヲ與ヘ置キタルモノ程其治癒ガ安定デアアルコトハ認メラレルガ、ソレ以上ノ變化ハ少クモ顯

著「デハナイ。故ニ糠「エキス」ガ結核治療ニ關係ガアルトシテモ先以テ問題トナルハソレノ缺乏ノアル場合ノコトデアアル。輕度ナ缺乏ガアツテ分ラナイデ居レバ不利ダカラトイフコトガ第一ノ問題デアリマス。併シ輕度ナ「ヴィタミン」B缺乏ヲ發見スルコトヤ、「ヴィタミン」B缺乏ノ無イ場合ニ之ヲ與ヘテ其效果ヲ識別判定スルコトハ固ヨリ困難ナ問題デアリマスカラ、私ハ我國ノ如キ白米食國ニ於ケル結核患者ノ榮養療法トシテハ先以テ之ガ實行ヲ先キニスベキデアルト考ヘマス。「ヴィタミン」B補給ハ核結患者ニ對シテタトヒ有效ナリトスルモ固ヨリ體力ノ増進ヲ目的トスル補助療法トシテ見ルベキ性質ノモノ故長期ノ觀察ヲ遂ゲ比較的多數ノ患者ニ對シテ對照考察スルデナケレバ決定シマセン。此意味ニ於テ私ハ好デ結核患者ニ對シテ私ノ糠「エキス」ヲ試用スルコトニシテ居リマスガ、ソノ治療成績トシテ取纏メテ御報告スルコトハ容易デアリマセン。

合併症除去竝ニ混合感染黴毒菌自家「ワクチン」療法

諸種ノ合併症ヲ除クトイフコトハ一般療法中ノ殊ニ重要ナ一事項デアリマス。就中感冒乃至氣道ノ加答兒ハ速ニ除カネバナラヌコトハ前ニ述ベマシタ。其他麻疹、「インフルエンザ」等ヲ防グヲ要スルハ勿論デアリ、糖尿病等ニモ注意ヲ要スルコトハ申迄モアリマセン。胃腸腎臟等榮養ニ關スル臟器ノ状態ハ固ヨリ顧ミテバナリマセン。

次ニ肺結核病竈ノ混合感染ヲ有スルモノハ、ソノ混合黴菌ヲ培養シテ、ソレノ自家「ワクチン」ヲ製シ、之ヲ注射シテ混合感染ノ病勢ヲ弱メタラバ、肺結核ノ全經過ヲ良好ニ導クコトナキヤニ就キ、目下試驗中デアリマス。

此試驗ハ私ガ一日輕井澤ニ於テ、ドクトル、マンロー氏ト語り、氏ノ談話ヲ動機トシテ著手シタモノデアリマスガ、新シイ文獻トシテ興味アルハ Arthur Becker 氏ノ報告デアリマシテ、氏ノ結果ハ頗ル良好トナツテ居マス。我々ノ所デハ多少良好ナル如キ例モアリマシタガ、未ダ同氏ノ如キ成績ニハ至リマセンノデ今暫ク例數ヲ増加シタ後改メテ報告スルコトニシマス。

摘要

左ニ本文各條ノ主要點ヲ摘録シテ置キマス。

(一) 肺結核ノ治療ト豫防トハ理論上ニ於テモ實地上ニ於テモ相連續シタル一系統ノ事項デアリマス。故ニ豫防的治療又ハ治療的豫防ノ語ヲ用ヒテ此意味ヲ表ハスト實行上ニ人ノ注意ヲ喚起スル所ガ大キイト考ヘマス。

(二) 一般療法ハ衛生、榮養、氣候療法トイヒマスガ、物理學的療法ニ屬スル以外ハ生理的療法ト總稱シテモ可イト思ヒマス。

(三) 身體安靜ハ直接ニ又ハ新陳代謝減降ヲ介シテ心臟、肺臟ノ安靜ヲ來シ、此爲メ諸種ノ良結果ヲ齎シマス。其主ナル一二ノ點ヲ述ベマス。結核菌ガ肺ノ健康部ヘ撒布サルル機會ヲ減ジテ病竈ノ増大ヲ防グコトハ安靜療法ノ有效ナル理由ノ一ツデ所謂豫防的治療ノ實際化デアリマス。

結核菌ノ外亦結核毒モ病竈ニ於ケル血液等ノ循環ノ減少ニ伴ヒテ病竈ヨリ外部ヘ流出スルコトガ減少スル譯デアリマス。

(四) 肺結核ノ一般療法實行ニ當テハ「ツベルクリン」ノ皮下注射ニ因テ全身症狀ノナルベク起ラヌヤウ、而シテ「ツベルクリン」ニ對スル局所反應ノナルベク昂上スルヤウニトイフヲ一ツノ目標トシテ可イト考ヘマス。

「ツベルクリン」皮下注射ニ因ル全身反應ハ病勢ノ餘リ高度ナラヌ限り、全身症狀ノ尙明カナ患者ニ著明デ、病勢ノ安定トナレル患者ニハ弱イカ又ハ起ラヌトイフコトガ多クアリマス。故ニ此全身症狀ハ病竈ヨリ流出スル天然ノ結核毒ニ基クモノト見レバ(他ノ原因ニ由ルモノモ固ヨリ少クナカラウガ)、充分ニ身心ノ安靜ヲ守ラシメテ、心臟肺臟ヲ安靜トナシ、病竈ニ於ケル血行ヲ輕減シ、以テ結核毒ノ病竈ヨリ流出スルヲ制限スルコトガ、全身症狀ヲ治スルニ極メテ有益ナ譯デアリマス。

之ニ反シテ局所反應(例ヘバ「ピルケー氏反應」)ハ體細胞ノ防禦力ノ發現デアツテ、結核ニ感染シタ健康者又ハ輕症者ニハ

重症者ヨリハ比較的著明デアリ、又經過良好ナル患者デハ次第ニ著明トナリマス。故ニナルベク之レノ顯著トナルヤウナ療法ヲ講ズルガ有益デアリマス。

「ツベルクリン」反應ハ變動ガ多クアツテ必ズシモ一律ニハ行カズ、又結核ソノモノニハ他ニ顧ミルベキ點モ多イノデ一概ニハ云ハレナク、唯比較的ノ話デアリマスガ、上記ノ考モ治療上ノ目標ノ一ツニハナルト思ヒマス。

(五) 筋肉ノ運動ト心肺ノ動靜トノ關係ヲ説ク序ニ呼吸體操ヲ紹介シテオキマシタ。

(六) 肺臟ヲ靜置スル外科的療法ノ中人工氣胸ニ就テ一言シテオキマシタ。

(七) 腋窩溫ト直腸溫トハ先人ノ言ノ如ク相竝行セザルコトノ方ガ遙カニ多クアリマスガ、體溫ノ變化スル場合ニハ直腸ノ方ガ遙ニ著明ニ現ハレマス。

健康者ニ於ケル試驗ニ依ルニ、直腸檢溫ハ深サ二寸、時間五分トスレバ、ソレ以上深サヲ増シ(三寸)、又ハ時間ヲ長ク(十分)シテモ、平均ノ上デハ攝氏一度以下ノ差ニ過ギマセン。

(八) 婦人ニテハ月經ニ關聯シテ體溫ノ昇降アルハ能ク分テ居ルコトデアリマスガ、重要ナ問題デスカラ一例ヲ掲ゲテオキマシタ。

(九) 運動又ハ入浴ノ影響ヲ調査スルニハ其直後ノ體溫及ソレノ經過ニ注意スルヲ要シマス。出來レバ直腸檢溫ヲ行ハセルコトガ特ニ必要デアリマス。之ハ日本デハ餘リ行ハレテ居ナイノデ一言シテ置キマス。患者デハ直後ノ體溫上昇ガ健康者ヨリハ高クアツテ、又ソレノ下降ガ遅ク且少イトイフガ平均上ノ成績デアリマスガ、ソレデモ日常ノ腋窩檢溫ノ溫度表上ニハ其ノ影響ノ表ハレヌ事ガ多イカラ輕々ニ看過セヌヤウ注意ヲ要シマス。

(一〇) 健康者ニ於ケル入浴後ノ體溫脈搏ノ上昇及其經過ノ表ヲ掲ゲテオキマシタ。三十分以後ニハ體溫ガ却テ入浴直前ヨリ下降シ以後暫ク下降シテ居マス。

(一一) 精神感動ハ意外ニ大ナル不良影響ヲ與ヘマス。殊ニ悲哀心配ノ後其他怒ノ後、精神的仕事ノ後、談話ノ後等ニハ食慾體溫其他ノ徵候ノ上ニ不良ノ影響ヲ見ルコトガ著シク多ク咯血、血痰ノ増シ又ハ起ルコトモ稀デアリマセン。喜

ビ又ハ慰ノ後ニモ體溫上昇ハ多ク起リ咯血、血痰ニ及ボス不良影響モ相當ニ多クアリマス。但食慾其他ノ徵候ニ對シテハ良好デアツタ場合ノ方が多クアリマス。

(二二) 肺結核ノ治療的豫防ノ立場カラ學生ニ過勞ヲ強ユル今日ノ我國ノ教育ノ弊害ヲ駁撃シテ置キマス。

(二三) 開放大氣療法ハ日本デモ徹底的ニ實行ガ出來マス。濕氣ガ多イカラ日本デハ行ヘナイトイフハ誤リデアリマス。

(二四) 一定ノ患者ヲ選ミ高度ノ寒季開放療法ヲ行ヒ、藥劑ハ止ムヲ得ザル對症藥ノ外一切與ヘズニ置キテ觀察スルニ、其經過ハ一般ニ比較的良好デアリマス。體溫降下咯痰盜汗減少、密閉室ニ於ケル息苦シサノ消失其他各種ノ良徵ガ認めラレマス。患者ノ氣分食慾睡眠等ノ自覺モ著シク良好デアリマス。

(二五) 病期ノ進ムニツレ、熱候ノ高キニツレ、經過ノ不良ニツレテ、開放療法中ニ氣分食慾睡眠等ノ不良ヲ感ズルモノガ多クナリマス。併シ之レハ必ズシモ開放療法ヲ厭フトイフ意味デハナク病勢ソノモノニ因スル不良モ混ジラレ易イノデアリマス。

(二六) 一日中ノ各時刻ニ就キ、又各食時ニ就テ氣分食慾ノ良否ヲ檢スルニ、ドノ時間トテ、特ニ不良ヲ訴ヘルモノ、著シク多イトイフハアリマセン。

(二七) 寒季ニ於テモ、開放療法ハ慣レテソレヲ好ムニ至ルトイフヨリハ、初メカラシテ喜ブトイフガ多數患者ノ言デアリマス。

(二八) 寒季開放療法ニ於テハ、諸種天候ノ中デ風ヲ一番好マナイトイフ者が最も多數デアリマス。詳言スレバ快晴ヲ最も氣持チ良シトスル者が最も多ク、次ハ雪及ビ雨デ、次ハ曇次ハ風トイフ順位デアリマス。

(二九) 感冒ハ肺結核ノ發病又ハ増悪ノ原因トシテ最も恐レルベキデアルガ、寒季開放療法ニ於テモ感冒患者ハ意外ニ少クアリマス。六、七月頃ト比較シテモ倍位多イ日ガ少シハアリマスガ、多クハ同ジ位デアリマス。殊ニ慣ル、ニ從テ幾分ハ減少シマス。

(二〇) 肺結核患者ノ死亡。病勢經過及ビ諸種ノ病狀ニ對シテハ、暑季ガ甚ダ危險デ、寒冷季節ハ安全デアリマス。暑季ニハ患者ヲ涼シイ處ヘ移スノガ有利デアリマス。森林ノ中デハ我々ノ病舎内ヨリ攝氏三度又ハ四度モ低クアリマス。氣溫高クシテ比濕亦高キ季節即チ蒸暑キ季節ガ殊ニ不良デアリマス。之レニ反シテ寒冷ハ良好ナル刺戟デアリマス。

(二一) 寒季開放療法中ニモ、濕氣高キトキニハ患者ノ自覺ニ於テ、不良トスル者ガ多クアリマス。故ニ濕氣ハ關係ナシトハ云ヘマセンガ、ソレハ比較的良イトカ悪ルイトカイフ意味ノ問題ニ過ギナクシテ開放療法ヲ中止セシムル程ノ問題デハアリマセン。

(二二) 寒冷刺戟ハ脈管運動神經ヲ刺戟シテ脈管ノ收縮ヲ起リ易カラシメ、之レニ依テ感冒ニ對スル抵抗力ヲ高メ(鍛鍊 Abhärtung)從テ又結核ニ對スル抵抗力ヲ高メルモノデアリマスガ、之ハ寒冷刺戟ノ交感神經系ニ對スル作用ノ一徵デアリマス。肺結核患者ハ植物性神經系殊ニ交感神經系ノ機能減降ヲ起スモノデアリマスカラ、之ニ對シテハ寒冷ハ適當ニ應用スレバ良好ノ刺戟劑トナル譯デ、其爲諸種ノ良影響ヲ來スモノト考ヘラレ、間腦ノ植物性神經系中樞ガ媒介ノ任ニ立ツモノト察セラレマス。寒冷季節ノ開放療法ノ結果、臨牀上ノ經過ノ良好ナル者ニ於テハ「ツベルクリン」ノ局所反應ハ著明トナリマス。之ハ體細胞ノ防禦力ヲ高メタモノト云ヘマスガ、之レノ來ル理由モ(少クトモ其理由ノ一ツハ)寒冷ニ依ル交感神經系乃至植物性神經系ノ刺戟ニ在ルモノト見ラレマス。

(二三) 人工太陽燈射照ノ腸結核ニ有效ナリシ病例ヲ擧ゲテ置キマシタ。

(二四) 寒季日光浴ニ於テ風ヲ遮ツタ樽ノ内部デハ今年一月二十三日ニ東京市療養所デ攝氏二四度半ニマデ至リマシタ。

(二五) 家屋ハ外界ノ氣象ヲ緩和スル作用ガ甚ダデアリマス。之ハ開放程度ヲ種々ニ變ジタル病舎又ハ全ク開放サレタル臥堂ニ於ケル氣象ヲ互ニ比較シテモ分リマスガ、日光ノ直射ヲ横タヘタル樽ノ中ニ受ケテ觀測スルト樽ノ内ハ樽ノ外ニ比シ、氣溫高ク濕度低クシテ、其差ノ大ナルトキハ氣溫デ十四度半、濕度デ四六%モ差違ヲ示スコトヲ見マシタ。故

ニ平素家屋ノ戸ヲ閉ヂテ起臥シタル者ガ開放療法ニ入ルト、ドノ位氣象ノ相違アル所ニ身體ヲ暴露サスルコトニナルカガ分リ、刺戟ノ増大スル度合ノ實況ガ想像サレマス。

(二六) 氣溫濕度ノ動搖ノ大ナルハ樽ノ内ニ多ク、ソレノ小ナルハ樽ノ外ニ於テ頻繁デアリマス。之ヲ模型トシテ、家屋ノ内外ニ就テ考ヘマスト寒イ通リ風等ノ爲メニ感冒ニ罹ル危險ハ内ノ方ガ多イ譯デアリ、又適度ノ刺戟劑トシテ應用スルニハ外ノ方ガ却テ安全ナ譯デアリマス。

(二七) 療養家屋ニハ「ベランダ」ト溫カキ室ト兩方アルノガ完全デアリマスガ、多クノ患者ヲ同室ニ容レルニハ前者ヲ大キク、後者ヲ小サクシテモ差支ヘアリマセン。一室ニテ行フニハ戸障子ノ開閉ニ細心ノ注意ヲ拂ハチバナリマセン。

(二八) 體重ノ日時動搖ハ日本人デ三百匁以上ニ及ビマスカラ、體重測定ニハ時刻ヲ一定スルコトガ肝要デアリマス。例ヘバ毎回必ズ朝食前大小便ヲ終ヘテ後トシテ置ケバ便利デアリマセウ。

(二九) 榮養佳良ハ重要デアルガ、無意味ナル過度ノ肥滿ハ却テ不利ヲ來スコトアル知ラチバナリマセン。

(三〇) 食品ニハ生理的必要成分ガ何レモ、缺乏シナイトイフコトノ肝要ナルハ勿論デアリマスガ、其ノ一例トシテ「ヴィタミン」B 缺乏ガアレバ、肺結核療養患者ノ榮養トシテ如何ナル不利ガアルカトイフ理論ヲ一通リ説明シテ置キマシタ。

(三一) 各種ノ合併症ノ除去ハ固ヨリ肝要デアリマスガ、混合感染ヲ有スル患者ニ於テハ其混合菌ノ自家「ワクチン」療法ハ適當ニ用フレバ有效ナコトガアルト思ハレマス。

以上ハ一般療養ノ各項目ノ中自分ガ現ニ問題トシツ、アル事項トシテ述ベタ所ノ撮要デアリマスガ、尙一般療法ノ全般ニ關スル事項ニ就テ一言シマスト

諸種ノ治療項目ハ其一ツ／＼ノ事ガ完全ニ出來レバ可イトイフ譯デハナク、各般ノ必要事項ガ皆揃テ合理的ニ行ハレルトイフコトヲ肝要トスルノデアリマス。

又夫々ノ治療項目ニ就テモ個人的ノ差別トイフモノガ可ナリ大ナルモノデアリマス。ソレハ殊ニ各種ノ治療成績ヲ統計ニシテ示サウトイフ時ナドニ於テ一層明ニソウ感ゼラレマス。一ツノ統計モ之ヲ經過ニ依テ分ケ、病期ニ依テ分ケ、更ニ病型ニ依ツテ分ケルトイフ風ニ色々ニ分ケテ見ルト非常ニ表ガ多クナリマスガ、之ハ畢竟願ミルベキ事項ガ甚ダ多イカラデアリマス。故ニ實際ニ當テハ一々ノ患者ノ個人的關係ヲ充分ニ省察シテ實行セラレントヲ望ムノデアリマス。最後ニ申述ベテ置キタイコトハ肺結核ノ一般療法ヲ長イ間合理的ニ遂行セシムルトイフコトハ非常ナル患者ノ意志力ヲ要スル困難ナ仕事デアリマス故ニ、吾々醫師トシテモ一般療法ハ患者ノ教育デアルトイフ觀念ヲ充分ニ強ク持チ、忍耐カヲ振テ従事セテハ出來ナイ仕事ガアルトイフコトデアリマス。

本報告ノ取纏メニ當テハ東京市療養所醫局員諸君ハ勿論、看護婦、薬局及事務局ノ諸君ヨリモ多大ノ援助ヲ與ヘラレ、患者諸君モ熱心ニ諸種ノ調査ニ應ゼラレ、尙他方面ノ自宅療養ノ方ヨリ得々材料モアリマスノデ、茲ニ是等諸君ニ對シ厚ク感謝ノ意ヲ表シテ置キマス。

主要文献

- 1) **Brauer, Schröder, Blumenfeld**, Handbuch der Tuberkulose. 2) **Randellier-Koepke**, Die Klinik der Tuberkulose. 3) **H. V. Hayek**, Das Tuberkuloseproblem. 4) 其他諸氏ノ結核学. 5) *Annal, Medical Report of the Trudeau Sanatorium.* 6) **Arthur Waldler**, Allgemeine Therapie der Tuberkulose. *Klin. Wochenschr.* 5, Jahrgang Nr. 4. 7) **H. V. Hayek**, Zur „Entwicklungsdiagnose“ Tuberkulöser Lungenerkrankungen. *Zeitschr. f. Tuberkulose* Bd 41, Heft 3. 8) **G. Bossan**, Tuberkulin. Diagnostik und-therapie *Klin. Wochenschr.* 1925, Nr. 9. 9) **Paul M. Andrews**, A Clinical Study of Skin Hypersensitiveness to Tuberculin. *American Review of Tuberculosis* Vol. XI, No. 6. 10) **Bericht** über die Jahresversammlung der Vereinigung der Lungenheilstättenärzte von 27-29, Mai 1924, in Calburg. *Zeitschrift f. Tuberkulose* Bd. 40, Heft 7, S. 524. 11) **Gunn Ernst**, Vegetative Allergie. *Beiträge Zur Klinik der Tuberkulose* Bd 60, Heft 1. 12) **F. Ginsler**, Das Fieber eine vegetative Neurose. *Zeitschr. f. Tuberkulose* Bd. 42, Heft 5. 13) **Arthur Becker**, Die mischinfektion bei Lungentuberkulose und Versuche ihrer Behandlung mit einer Auto-Mischvakzine. *Zeitschr. f. Tuberkulose* Bd 42, Aeft 2. 14) **遠藤繁清, 黒丸五郎, 鈴木佐内**, 肺結核ノ發病動機ニ關スル統計的觀察. 「結核」第三卷、第六號. 15) **佐々虎雄**, 肺結核患者ノ入浴ニ就テ. 「結核」第二卷、第四號. 16) **春木秀次郎**, 所謂「シソバチコトニー」トセルケー氏皮膚反應

トノ關係(中外醫學新報、第一〇一—一〇二號)。17) 田澤藤二、「ヂイタミソ」B試マト結核トノ關係、結核、第三卷、第一號、18) 田澤藤二、尾寺殿治、我國ニ於ケル大氣療法ノ實施ニ就テ、「結核」第三卷、第三號、19) 宮川米次、肺結核患者ト其體重、結核、一卷、第一號、20) 東京市瘵癆研習局同人、「ヂイタミソ」Aハ果ソテ結核ニ有效ナリヤ、結核、二卷、第一號、21) 遠藤繁清、村尾圭介、肺結核患者ノ腋窩檢温ニ就テ、結核、一卷、第一號、22) 川上理作、肺結核患者血壓ノ臨床的觀察、結核、三卷、二號、23) 高橋夏樹、結核患者ノ血壓ニ關スル知見補遺、結核、一卷、二號、24) 佐藤秀三、醫學的氣候學小論、結核、三卷、二號、25) 島崎豐、「サナトリウム」ニ於ケル臨床的操作、結核、一卷、三號

宿題演說「肺結核ノ一般療法」ニ對スル附議

一

梅村 敏三 郎

結核療法ニ對シ精神の方面ニ重キヲ置クベシ。

二

醫學博士 山北 又十郎

結核ノ一般療法ニツキテハ有馬及ビ田澤兩氏ノ御報告ニヨリ詳細ツクセリト思ハル、モ、余ハ二三ノ實驗談ヲ申上ゲ諸君ノ御參考ニ供シタイノデアアル。有馬氏ハ結核下熱劑ニツキ「ピラミドン」及ビ「ヒニン」劑ノ配合ヲ御ス、メノ様デアアルガ、余ノ經驗デハソレラデハ中々效ガナイ、余ハ「ピラミドン」ニ「ピノザリン」ノ配合ガ最モ有效ノ様ニ思フタ。祛痰鎮咳劑ニツキテハ巷間新藥ト稱シテ數多アレド、廣告通リニ有效ナモノハ一ツモナイ、實際ハ「コデイン」、「モルヒネ」等ノ麻醉藥ガ第一ダ。盜汗ニ對シテ有馬氏ハんにく製劑ノ注射藥ガ良イトイハレタガ余ノ保養園デハ五年來にんにく製劑ヲ内服セシメテ居ルガ他ノ症狀ニ對シテハ有效ト思フ場合ガ多イガ特ニ盜汗ニ有效トハ思ハレヌ。次ニ咯血藥ノ話デアアルガ、近來發賣ノ肺臟々器製劑デアアル「クラウデン」ハ使用ガ便利デ有效デアルト思フ場合ガ多イ。「ゲラチン」ヤ「カルチウム」、食鹽水ニ比シ劣ラヌ。結核ノ呼吸困難ニ對シテハ強心劑及ビ酸素ノ吸入ヲ推奨スル、酸素吸入ノ效果ニツキテハ余ハ動物竝ニ患者實驗ヲナシ、既ニ大正十年ノ內科學會デ報告シタ、酸素吸入ノ效果ハ之レヲ吸入セシメテ居ル間ノミ血液瓦斯ニ對シ效果アリ、酸素吸入ヲ十分カ二十分丈ヤツテヤメテシマフノハ何モ效ガナイ。結核患者ノ下痢、